

書評

キャスター・
北海道大学客員教授
林美香子

ふぞろいなキュウリと地上の卵

駒井一慶・著

ユニークなタイトルのこの本は、農家の自伝的ノンフィクション。副題が、著者の紹介にもなっている。この欄で、現役農家の著作が紹介されるのは珍しいかもしれない。

大規模酪農経営に失敗して牛舎の鉄くずを売り、その資金でひよこを買い、50歳を過ぎてから地上飼(平飼)の卵農家を始めた波瀾万丈の人生。そこに安定供給の難しさなど、農業の多くの課題が縦横無尽に絡んでくる濃密な内容だ。深刻な話も多いが、生産する有精卵に「恋するタマゴ」と名付けるなど、ユーモラスな面も感じられる。無肥料・無農薬栽培の野菜や卵を宅配することになった経緯の記録でもある。平飼いの苦労や、無肥料・無農薬栽培での雑草との戦いは、本当に大変そうだ。

持続可能な農業に挑戦して開始したのが、小規模農家販売共同体。流通によって分断されている生産者と消費者の関係を修復したいと自ら宅配を決意。小規模農家



小規模農家の生き残る道

- ◇出版＝寿郎社
- ◇価格＝1650円
- ◇副題＝〈無肥料・無農薬〉の野菜と卵を100キロ離れた札幌に宅配する北海道豊浦町の農家のおじさんのはなし
- ◇こまい・いっけい
1951年、北海道豊浦町生まれ。酪農学園短期大学卒業後、酪農に従事。

が集まり「ふぞろいなキュウリ」の屋号で札幌まで宅配販売する生産・流通・販売の共同体で、これこそが小規模農家の生き残る道と訴えている。

大規模農家が多く、冬の長い北海道でこの方式を継続させるのは、並大抵の努力ではないだろう。著者の強みは、それを評価して購入する消費者がいることだ。「買い物は投票」と語る女性客の声を励みにこの本を書き始めたという。スローフード運動で「共生産者」と呼ぶ、農業を理解・応援する消費者をたくさん味方に付けているのである。

持続可能な農業のためには、有機栽培・無肥料栽培など環境面への配慮はもちろん重要だが、生産者を理解・応援する消費者の存在も大切だ。農業者の皆さんには、その観点からも一読を勧めたい。地道なこうした活動の積み重ねが、地域の農業を支え、国産食料自給率の向上にもつながるのだと思う。